



vol. 10

亜細亜大学
国際関係学部編集



国際関係・多文化
フォトジャーナル

Asia University Faculty of International Relations



Contents

- 04 **ESSAY**
ナガランドの食材
小磯千尋
- 10 **ESSAY**
中国・武漢の旧「租界」を訪ねて
——その歴史といま——
青山治世
- 20 **銅像よもやま話 10**
座像
高山陽子
- 28 **フィールドワーク**
「フィールドワーク実践論」
——学習効果と課題——
小河久志
- 32 **フィールドワーク**
ポストコロナの海外研修
——ベトナムの事例——
大塚直樹＋履修学生
- 39 **学部報告**
多文化コミュニケーション学科10周年
「日本の多文化共生の10年」
今野裕子



かや

榧

とは



亜細亜大学内のゆうちょ銀行ATMの裏側に記念樹があります。それが榧の木です。この記念樹は、1941（昭和16）年の本学創立当初に植樹されました。先達に敬意を表わしつ

つ、半世紀以上にわたり本学の歩みを見守ってきた榧とともにグローバル化時代に挑戦してゆこうという国際関係学部の思いが本ジャーナル名の由来です。



亜細亜大学 国際関係学部

〒180-8629 東京都武蔵野市境5-8

学部についての詳細は

<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

『榧』はPDFデータでも閲覧いただけます。

※亜細亜大学学術リポジトリから入手できます。



写真1：ナガランド州の首都コヒマからの眺望



写真2：棚田の景色

ESSAY

ナガランドの食材

小磯千尋

ナガランド(図1)はインド北東部に位置する州(人口約198万人)で、ミャンマーと国境を接している。そこに暮らす民族はチベット・ビルマ語群に属するモンゴロイドである。「ナガ」とは当該地方の主たる16(60を超える)と見る見方がある)の民族集団の集合名称であり、ひとつの民族として存在しているわけではない。かつて彼らは

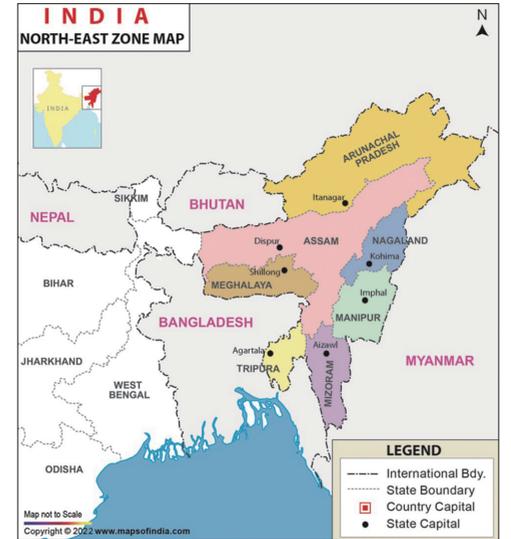


図1

自らを「ナガ」と呼ぶことはなかったといわれており、互いに首狩りをするなど敵対関係にあった。しかし19世紀以降のキリスト教への改宗などを経て、今日に至るまでにすべてをひとつの「ナガ」民族と捉える新たなアイデンティティが生成されてきた。この稿では「ナガ」の食文化の特性を食材から紹介する。

平地の少ないナガランドではコヒマ(写真1)から北では水田耕作が、そこから北側は焼き畑農業が行われている。栽培されている作物はトウモロコシ、バナナ、パイナップル、コメ、アワ、ダイズ、ハトムギである。最近では香辛料のカルタモン(写真2)の栽培も人気である。また、段々畑(写真2)では陸稲も栽培されている。

●肉食

ナガランドの人々は他のインド地域に暮らす人々に比べて、肉食をする人が圧倒的に多い。特に、ヒンドゥー教徒やイスラム教徒に忌避されるブタ肉が好んで食されている。村の家にはブタ小屋があり、1、2頭飼育されているのが一般

的だ。ブタ肉は煮込み料理のほか、燻製のフレーク状にして非常に辛いラージャー・ミルチ(別名ブート・ジョロキア)(写真3)とともにふりかけのように調理される。これは長期保存も可能で、料理のだしのように利用されることもある。そのほか、市場でみかけたウサギ(写真4)、モルモット(写真5)、ハツカネズミなどの小動物のほか、イヌ肉(写真6、7)も好んで食べられている。牛肉も普通に消費されているが、ナガランドではミトウン・ウシ(写真8)というウシの肉が特に好まれている。ミトウン・ウシはジャングルで放牧され、山のハーブ類を食べているために、栄養価が高いとされる。肉質もよく、1頭から取れる肉の量は普通のウシの2倍近いという。ミトウン・ウシの肉は結婚式などの特別な機会に食べられるハレの食である。市場では見かけられなかったが、一般の家庭には猿の頭蓋骨も飾られていたことから、サル肉も食されていたようであ



写真9：種類豊富な干し魚



写真10：干しエビ



写真11：巣ごと売られているハチの子



写真12：タニシ



写真13：カエル

る。そのほか、さまざま野鳥類が食べられている。ナガの知人は子どもの頃、手作りのスリングで野鳥を捕獲したと話してくれた。

●魚

魚類は隣の州マニプル産の多種類の淡水魚の干し魚(写真9)が目についた。ウナギやドジョウも好まれる。そのほか、干しエビも売られていた(写真10)。

最近ではインド内地からの輸送手段の進歩により、生魚も市場に出回るように

なってきた。これは主に南インドのアーンドラ・プラデーシュ州出身者によって牛耳られているという。

●昆虫食、ほか

ナガランドの食を特徴づけるものとして、昆虫食があげられる。山でとれるハチの子(写真11)、カイコやバッタなどが市場で売られている。最近ではハチの子などは入手が難しくなり、珍味として高価に取引されるといふ。昆虫ではないが、タニシ(写真12)やカエル(写真13)が

●納豆

興味深いのはバナナやサトイモの葉に包んで発酵させた納豆アクニ(写真14)が



写真5：市場で売られているモルモット



写真6：市場で売られているイヌ



写真7：解体されたイヌ肉



写真8：野生のミトゥン・ウシ



写真3：市場で売られているラージャー・ミルチ



写真4：市場で売られているウサギ



写真16：漬けこまれたタケノコ（シナチク）

●保存食
保存の方法としては、乾燥、燻製、塩漬け、発酵に大別される。タロイモの葉、カラシナ、タケノコなどの植物は乾燥させたり、発酵させて保存する。動物の肉や魚はほとんど囲炉裏の上の竹の柵（写真17）に置いて燻製にすると長期保存

菜と同じくらい大量に投入される。

好まれていることだ。粘り気はあまりないが、かなりの異臭をはなち、市場に売られていたものにはウジのような白い虫がうごめいていた。アクニはナガランドの人々のソウル・フードといえるように、アクニをめぐる臭いの騒動をテーマとした映画が撮られているくらいだ。アクニは調味料のように利用されることが主で、煮込み料理入るといい出汁を出してくれる。アクニの作り方はいたって



写真14：アクニ（納豆）



写真15：辛いチャートゥニー（チャツネ）

簡単で、柔らかく煮たダイズをバナナやタロイモの葉を敷いたカゴに入れ、炉の近くに数日置くと5〜7日で発酵する。それをそのまま利用する場合もあるが、囲炉裏の上で1か月ほど燻製にして長期保存することもある。これは水に戻して、トウガラシやニンニクとともにすり潰してチャートゥニー（チャツネ）（写真15）として食べると美味しい。

が可能となる。

●まとめ
ナガランドの食材を概観したが、食材やその保存法をみても、ナガランドは東南アジアの食文化圏に入るといえる。肉食へのタブーもなく、昆虫食も取り入れた食文化は大変豊かである。豊富なたんぱく質を摂る人々は頑強な体つきをし

●タケノコ、シナチク

ナガランドの煮込み料理によく使われるのがタケノコである。生でも食べられるが、大半は発酵させて保存する。固い部分は繊維を臼で搗いて柔らかくする。まとめて漬物のように重石をしておくと数日で汁が出てくるのでその汁を容器にまとめておく。タケノコはさらに1か月ほど漬けておいてから（写真16）取り出し、また汁を絞り、その汁を別に集めておく。汁気を絞ったタケノコは天日干しをして乾燥させる。この乾燥したタケノコは発酵しており大変すっぱくなっている。このタケノコは料理に使われるが、その酸味は調味料の役割も果たしている。タケノコから出た汁も調味料として料理に欠かせない。

●ラージャー・ミルチ

ナガランドの料理に不可欠なものが、世界一辛いといわれているラージャー・ミルチである。すべての煮込み料理に野

ている。自然との共生が続いているナガランドの食文化からは学ぶことが多い。

註

(1) ※『アクニ〜デリーの香るアパート』
2019年インド映画 / 108分 / ヒン
ディー語・英語・ナガ語他 / 原題…
Axone II アクニ



写真17：調理場でもある囲炉裏とその上の燻製用の柵



写真1：武漢を流れる長江と筆者（漢口側の港から。対岸は武昌の街並み）



写真2：漢口租界略図（戦前に日本人が作製したもの。辛亥革命武昌起義記念館の展示パネルより）



写真3：漢口のフランス租界に建てられていた境界碑（辛亥革命武昌起義記念館の展示品）

ESSAY

中国・武漢の 旧「租界」を訪ねて

——その歴史といま——

青山治世

1 武漢と租界

武漢と聞くと、世界中の人々を病魔だけでなく、様々な行動制限によって精神的にも経済的にも苦しめた、あのいまわしい新型コロナウイルス(COVID-19)の感染が最初に拡大した中国の街として思い起こす人が大半だろう。とくに現地に住む人々にとっては、はなはだ不本意な形で世界的に「有名」になってしまったこの街は、中国中部に位置する湖北省の省都で、古くから中国の東西と南北の交通路が交差する文字どおり要衝の地である。そのため中国史にとってはきわめて重要な場所であり、とりわけ最後の王朝・清を滅亡へと追いやったあの辛亥革命が勃発した地として、中国史のみならず世界的にも有名な都市である。

中国近現代史を専門とする筆者がその武漢を初めて訪れたのは、大学生時代にこの分野の研究を始めてから二〇年以上たった二〇一八年一〇月のことだった。その一年あまり後にこの地で新型コロナウイルス

が広がり始め、二〇二一年一月にはロックダウン（都市封鎖）となり、その後長く中国では「ゼロコロナ」政策が続けられたから、一年数か月遅れていたら、いまだに訪問できていなかったかもしれない。

そもそもこの地を訪れたのは、武漢大学で開かれた中国近代史の国際シンポジウムに参加するためだったが、秋学期中の土・日を利用して月曜のみ休講にするという強行軍での訪問だったため、学会発表以外の時間は、武漢「視察」にあてた。この時訪れた武漢にある辛亥革命関係の二つの記念・展示施設（辛亥革命武昌起義記念館と辛亥革命博物館）については、別稿（「はじめての武漢」『中国研究月報』二〇一八年一二月号）ですでに紹介しているので、今回はその時訪れたもう一つの名所、漢口の旧「租界」について写真も交えてその歴史をたどりつつ、いまの様子も垣間見ることにしたい。

武漢の中心部は武昌・漢陽・漢口の三つの地区に分けられ、漢口は武漢を横切

るように南西から北東に流れる中国一の大河・長江（揚子江）の北側に位置する港町である（写真1）。日本では黒船とよばれたアメリカのペリー艦隊が日本にやってくるまで数年たったころ、中国では清がイギリス・フランス両国と数年にわたっていわゆる第二次アヘン戦争（アロー戦争、一八五〇〜一八六〇）を戦っていた。断続的に続いた戦闘の合間に清とイギリスが結んだ天津条約（一八五八）によって漢口は開港場に指定され、終戦後に正式に開港された。その間、日本では日米修好通商条約がハリスと幕府との間で結ばれ、それをきっかけに政争が繰り返されて大老・井伊直弼が桜田門外で暗殺されたことである。

列強に開港された漢口には、その後、一九世紀後半にかけてイギリス（一八六一〜一八九二）、ロシア（一八九六〜一九二四）、フランス（一八九六〜一九四三）、ドイツ（一八九五〜一九一九）、日本（一八九八〜一九四三）の五カ国の「租



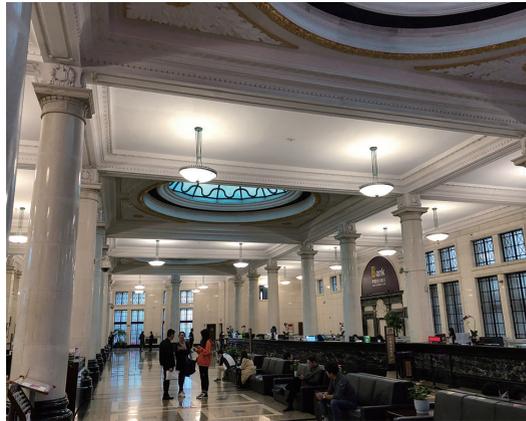
写真5：旧・香港上海銀行漢口支店



写真6：香港上海銀行漢口支店が描かれた同銀行が発行した紙幣（『大武漢影像』87頁）



写真4：漢口国民政府の外交部跡（現・武漢市檔案館）



左 写真7：旧・香港上海銀行漢口支店の内部。復元され現在も中国系の銀行として使われている
上 写真8：政府により「全国重点文物保护单位」に指定されたことを示すパネル

「界」が設けられた（写真2・3）。租界とは、一九世紀半ばから二〇世紀前半にかけて、上海をはじめとする中国の開港場に設けられた外国人居留地のこと、租界内の警察権・行政権を外国人（欧米人・日本人）が掌握し、中国政府（清のち中華民国）はそれに介入できない、いわゆる「治外法権」の地域であり、第二次世界大戦前後に廃止されるまで存在した。

武漢・漢口はそうした近代中国における租界の歴史の中で、中国人が初めて自力で外国租界を「回収」した場所としても知られる。一九二六年、前年に没した

孫文の後継者として広東国民政府の指導者となった蔣介石は、北方に割拠する「軍閥」とよばれた軍事政権を倒して中国を統一するため、いわゆる「北伐」を開始する。「反帝国主義をかかげる北伐軍（国民革命軍）は、漢口、そして江西省の九江にあったイギリス租界を占領すると、イギリス政府に租界の中国への返還を要求し、認めさせた。漢口の旧租界には、この時国民政府が外交部（外務省）を置いた建物も残されており、現在は近代以降の歴史資料を保管する武漢市檔案館（公文書館）となっている（写真4）。

2 旧「租界」を歩く

ここからは、現在も残る当時の建物を手がかりに、イギリス租界、ロシア租界、日本租界の順に紹介し、旧租界エリアの現在の状況についてもあわせて見ておきたい。なお、筆者が撮影した現在の様子を書いた写真とともに、武漢の近代の写真を解説付きで紹介した馮天瑜・陳勇編著『国際視野下的大武漢影像（1838-1938）』（人民出版社、二〇一七年、以下『大武漢影像』）に掲載されている租界当時の写真や資料もあわせて掲示することで、現在との比較の参考にしたい。

筆者がまず訪れたのは、旧租界の建物としてとくに有名な江漢関（漢口税関）からほど近い旧イギリス租界で、さっそく壮麗な洋館が目に入ったので近づいてみると、イギリス系の香港上海銀行（滙豐銀行、HSBC）の旧・漢口支店だった（写真5）。この建物は一九二〇年に完成したもので、現在は中国光大銀行の武漢支店として使われていた。

租界では欧米系の銀行がそれぞれ紙幣を発行・流通させていたが、一九二一年に香港上海銀行漢口支店が発行した一〇〇元札には、その前年に完成したこの建物が印刷されている（写真6）。一九四九年に中華人民共和国が成立すると、香港上海銀行は漢口から撤退し、その後中国

の様々な企業や組織によって使われたが、一九九八年以降は中国光大銀行が入り、内部は創建当時の装飾が復元されている（写真7）。

このあと紹介する多くの建物も含め、これらの歴史的建造物の多くは中国政府によって「漢口近代建築群」として「全国重点文物保护单位」（文化財のこの）に指定され保護されている（写真8）。

そこから長江水運の港にあたる武漢港（漢口江灘）に向かい、川岸に立つと、眼前には広い川幅の長江を比較的大きな運搬船が往来している様子が広がっていた（写真1）。中流域の都市が対外的な開港地になるという中国の内河通航を改めて実感した。そして、「文化大革命」開始時期の一九六六年七月に、当時七三歳だった毛沢東がこの武漢の長江を泳いで渡ったというエピソードも思い起こしながら眺めた（時季によって流量・川幅は違うそうだが…）。

その後、旧ロシア租界から旧フラン



写真12 左：地下牢か？ 右：旧ロシア租界の交番跡



写真9：宋慶齡旧居記念館（旧・露清銀行漢口支店）



写真10：孫文夫人の宋慶齡（1927年・漢口にて。『大武漢影像』87頁）

ス、旧ドイツ、旧日本租界まで二キロほど歩いてみた。旧ロシア租界にも多くの租界時代の建物が現存している。旧ロシア租界の中でも租界時代の比較的立派な建物が残る一角は、「黎黃陂路街頭博物館」と銘打って、街自体が野外博物館という体を取っていた。ちなみに黎黃陂と



左 写真13：ジャーディン・マセソン商会が建てた高級住宅街
上 写真14：租界時代の洋風建築が民泊施設として使われている

は、辛亥革命の最初の武装蜂起（武昌蜂起）に際して、蜂起軍のトップである湖北軍政府都督となり（祭り上げられたというのが実態ではあるが）、のち中華民国大總統にもなった黎元洪のことである。ここでとくに目を引く建物が、革命によって中華民国の初代臨時大總統となった孫文の夫人・宋慶齡の旧宅（宋慶齡漢口旧居記念館、一八九六年建築開始）でもともと露清銀行（華俄道勝銀行）漢口支店として建てられた建物である（写真9・10）。さらに、租界時代にはキリスト教宣教師の宿泊所にもなっていた信義公所だった建物（一九二四年完成）に、現在では政府公認のキリスト教組織である武漢市基督教協会と、共産党によるキリスト教の管理・指導機関ともいえるのも興味深い（写真11）。

また、先に触れたとおり、租界内の警察権は外国側が握っていたため、租界には外国の警察署や交番も置かれていた

が、旧ロシア租界にはロシアの交番（巡捕房）だった建物も残されている（写真12）。建物の基礎部分に鉄格子の付いた窓があったが、半地下の留置場だったのだろうか。

同じく旧ロシア租界には、オシャレな飲食店街として再開発された一角もあった。珞珈山街房子（一九一〇〜二七年建築）とよばれ、香港を拠点に中国貿易に携わった最大のイギリス系商社だったジャーディン・マセソン商会（怡和洋行）が建てた高級住宅街である（写真13）。北京などでは、古い街並みである胡同に残る伝統的な住居「四合院」が民泊施設（民宿）として使われているところがあり、筆者も一度泊まったことがあるが、武漢の旧ロシア租界のこの一角には、租界時代の洋風建築が「民宿」として使われているところもあった（写真14）。

しばらく北に向かって歩いて行くと旧日本租界にたどり着く。ここも租界時代の建物がよく残っており、日本居留民団



写真11 左：信義公所跡（宣教師の宿泊所としても使われた） 右：現在は政府公認のキリスト教組織と共産党のキリスト教管理・指導機関が置かれている

物があるあたりに「三菱住宅」と書かれていたので(写真17)、やはり三菱関係の建物だったことは間違いないようである。ただ、なぜこれほど目立つ建物に標識パネルが付いていなかったのかは不明である。

また、旧日本租界の一角は「武漢天地特色旅遊街区」として整備され、カフェ



写真18：香港資本によって再開発された旧日本租界のエリア



写真15：旧日本租界で結婚写真を撮るカップル



写真16：三菱関係の建物。右側部分の1階と2階の間の外壁には三菱のマークがはっきり残る

の事務所跡などは、入口の門が閉められ、中の建物をよく見ることができなかつたが、もともと何の建物であったのかを示す標識パネルはしっかり付けられていた。

日本でも、東京の丸の内や横浜の旧外国人居留地など、洋館が立ち並ぶエリアでは結婚写真を専門の業者に撮ってもらうか、中国でも「婚紗撮影(婚紗照)」などとよばれ、真っ赤な伝統衣装を着て撮影に臨むカップルを街角でよく見かける。旧日本租界のあたりでもそうしたカップルに遭遇したが、二人が背景にしている建物にも少し離れた門のところにしつかりと標識パネルが付いており、「日本租界軍官宿舍(一九一〇年ごろ建築)」と書かれていた(写真15)。洒落た背景で綺麗な写真が撮ればもちろんいいのだが、やや複雑な思いがした。

そこから少し開けた一角に出ると、一〇メートルほど離れたところに、租界や服飾専門店のほか、日本のCOCOや番屋などの飲食店も出店しており、明治尋常高等小学校校長公邸だった建物は香港式の飲茶レストランになっていた(写真18)。ただし、校長公邸以外はほぼ新しく建てられたものようだった。このエリアの再開発は香港の不動産投資会社である新天地産集団が行ったもので、現在も続いているという。

3 旧「租界」の再開発

ここも含めて漢口の旧租界地区の中で、租界時代の建物が比較的多く残るエリアは「漢口歴史文化風貌街区」に指定され、再開発の対象となっていた。上記の旧日本租界エリアのようにすでに商業開発されているところもあれば、もと居た住民が退去した後も何にも使われず、簡易な壁に囲われたままになっている租界時代の建物があちこちに見られた。

そうした壁の一部には、「古くて危険な家から出て、綺麗な新しい家に移ろう」、

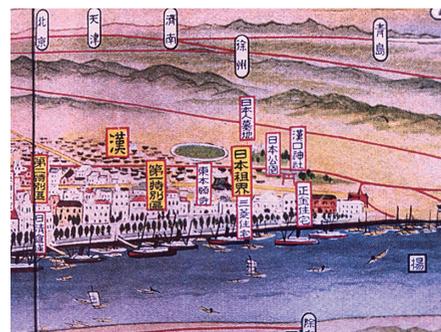


写真17：絵図「武漢三鎮」の日本租界部分(『大武漢影像』27頁)



写真19：租界時代の古い建築の修繕を呼びかける標語

「古くて危険な家を改造して、平安と調和を促進しよう」といったスローガンが書かれていた(写真19)。市民の安全と生活環境の向上を名目とした再開発の途中という印象を受けたが、現地の人にインタビューする術も時間もなかったため、当時はそれ以上調べられなかった。最近になって中国のメディアでの勤務経験もある武漢出身の胡琪さん(慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程)と知り合

時代のものと思われる洒落た建物を見つけたので近づいてみたが、標識パネルは付いておらず、何の建物だったのか、はじめはわからなかった。しかし、外壁をよく見ると三菱のマークが付いていたので、三菱関係の建物だったようだが、確信はもてなかった(写真16)。後になって、『大武漢影像』にも掲載されている一九三〇年代に日本人が描いた「武漢三鎮」という絵図を見ると、日本租界のこの建



写真20：再開発される前の巴公房子（パブロフマンション）
1910年にロシアの茶商人・パブロフ兄弟によって建てられた

い、市政府の関係者に少し事情を聴いてもらったところ、住民が退去した後も再開発がなかなか進まないのには、いろいろと複雑な事情があるとのことだった。

まずは、旧租界エリアの多くは国有企業や政府機関が所有権・使用权をもっており、もともとここに住んでいた住民たち（主に国有企業や政府機関の職員など）は通常の不動産所有証ではなく、居住許可証に基づいて住んでいたという。通常の不動産所有証とは異なり、居住許可証

の保有者は不動産を処分する権利がかなり制限されており、商業用住宅市場が開放されると、住民のほとんどが旧租界エリアから自主的に退去し、市当局による再開発計画以前に、すでに多くが空き家になっていたという。さらに、土地の使用権を取得するには、住民と

地権者である政府機関や国有企業の双方に同意を求めなければならないが、長江沿いのエリアは地価が高いため、使用权をもつ国有企業や政府機関が再開発を進める武漢市文化旅行局による土地取得手続きを遅らせているという。市当局は上位にあたる湖北省政府の機関や中央直轄の国有企業に対して力関係において劣るため、いまだに開発が進まない土地・建物が多く残されているとのことである。

また、土地の権利関係以外に開発の資

金面にも問題があるという。旧租界エリアは武漢市の中心市街地にあたるため、その商業開発には強い資金力が必要となる。旧日本租界では、前述のとおり、資金力のある香港の新天地産集団による開発が行われ、旧ドイツ・ロシア租界を中心とする青島路エリアでは、広東省珠江市の大手国有企業不動産デベロッパーである華発集団による開発が進み、筆者が訪れた二〇一八年当時よりも再開発が完了した建物も増えたという。たとえば旧ロシア租界にある「巴公房子」（パブロフマンション）とよばれる建物（写真20）は、今では高級ホテルに生まれ変わり、スターバックス・コーヒーも入ったとのことである。しかし、市当局のパートナーとなってこうした再開発を進められる巨額の資金を調達できる中国企業が少ないこともあり、再開発計画はなかなか進まないのが現状であるという。

*

旧イギリス租界を皮切りに、朝から旧租界エリアを歩きまわったが、旧日本租界のオシャレな一角でお茶を飲みながらしばらく一服したところで日も傾いてきたので、宿舎に戻ることにした。宿舎のホテルは少し離れた漢陽エリアにあったため、武漢軌道とよばれる高架式の新交通システムに乗って帰路に就いた。列車に乗りながら気が抜けたように外を眺めていたら、古めかしい洋風の建物が目に入ったので、慌ててカメラのシャッターを切った。写った写真を見ると、建物には「京漢火車站」（火車站は駅）と書かれていた。北京と漢口をつなぐ京漢鉄道の始発点である漢口駅の建物だった（写真21）。

京漢鉄道は一八九七年に当時の清朝がベルギーからの借款によって建設を始め、一九〇六年に北京・漢口間が全線開通し、京漢線となる。長江の南側にあたる武昌から中国南部の最大都市・広州を

結ぶ鉄道は一九三六年に開通しているが、中国随一の大河・長江にはなかなか鉄道橋が架けられなかった。武漢長江大橋が完成し、漢口と武昌が鉄道でつながり、北京・広州間の京広線が開通したのは一九五七年になってからのことである。旧租界めぐりの最後を飾るにふさわしい建物を見た気がした。

ここまで、一日かけて散策した漢口の



写真21 上：京漢鉄道漢口駅の旧駅舎（武漢軌道の列車から撮影）
下：1930年代の絵はがきに印刷された京漢鉄道漢口駅（『大武漢影像』155頁）

旧租界について、所感も交えて写真とともに紹介した。武漢・漢口は近代における列強の中国進出の歴史と現在の中国社会の変化を、同時に体感できる街である。新型コロナウイルスによって期せずして「汚名」を着せられてしまったが、機会があればぜひご自身の目で、その歴史といまをご覧いただきたいし、筆者も再訪できる日を楽しみにしている。



写真3：ウィーンのペートル大帝像



写真2：ウィーンのゲーテ像



写真6：杭州の魯迅像



写真5：紹興の蔡元培像



写真4：コペンハーゲンのアンデルセン像

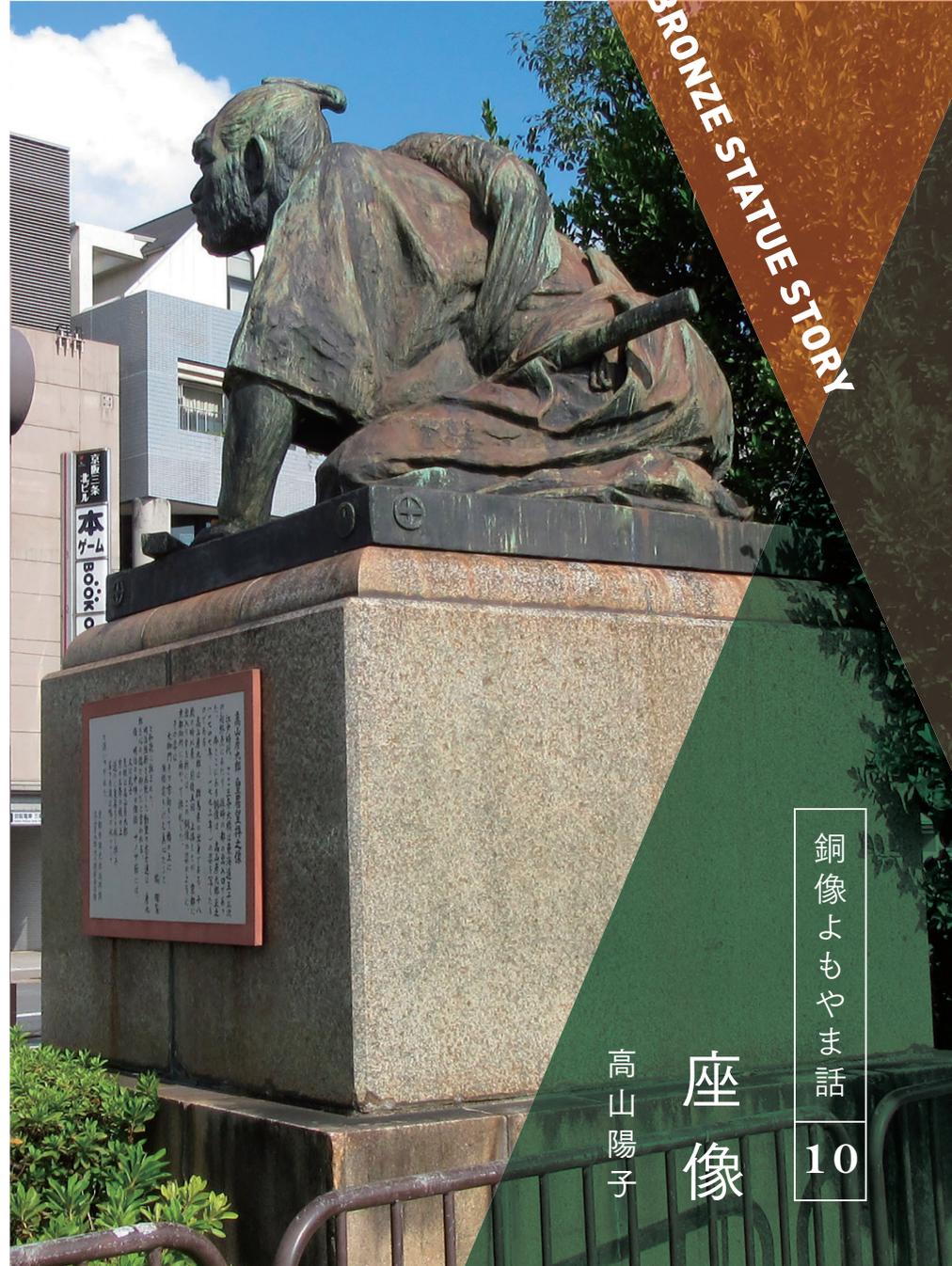


写真1：京都の高山彦九郎像

銅像よもやま話

10

座像

高山陽子

「ドゲザ」と呼ばれる銅像が京都の三条大橋の近くにある（写真1）。正式名称は、「高山彦九郎皇居望拜之像」といい、高山彦九郎（一七四七〜一七九三）が御所に向かって拝礼している姿を表す。尊王思想家の高山彦九郎は、西郷隆盛や吉田松陰などの幕末の志士たちに崇拜され、明治期には「人は武士、気概は高山彦九郎、京の三条の橋の上」と歌われた。初代の銅像は一九二八年に設置されたが、戦時下で供出され、二代目は一九六一年に再建された。

銅像は一般的な立像のほかに、座像もそれなりに見られる。例えば、ウィーンのゲーテ像（写真2）やペートル大帝像（写真3）、コペンハーゲンのアンデルセン像（写真4）、紹興の蔡元培像（写真5）、杭州の魯迅像（写真6）、隅田川テラスの芭蕉像（写真7）などである。このように、芸術家や知識人には座像が用いられることが多い。

ウィーンのゲーテ像は晩年の姿である



写真9：フランクフルト空港のゲーテ像

り、逃げるようにイタリアへ旅立つ。ゲーテは一七八六年から翌年までイタリア各地を旅行する。ローマ滞在中、友人の画家、ティッシュバインがゲーテの肖像画を描く。その一枚が有名な「カンパーナのゲーテ」である。大きなグレーの帽子に白い外套をまとい、ゆったり座る姿は、フランクフルト空港のゲーテ・バーの目印になっている（写真9）。



写真7：隅田川テラスの芭蕉像

が、ゲーテには若い頃の銅像も多い。ゲーテは一七四九年、フランクフルトの裕福な家庭に生まれ、一六歳のとき、法律を学ぶためにライプツィヒへ移り住む。彼は、宮中顧問官であった厳格な父親から離れ、法律の勉強だけではなく、詩の創作にも没頭する。ライプツィヒのゲーテ像（写真8）の台座の後ろには「一



写真8：ライプツィヒのゲーテ像

七六五年から六八年までライプツィヒで学ぶ」とあり、左右には二人の女性のレリーフが刻まれている。どちらもゲーテの恋人であった。

一七七二年、ゲーテは法律実習のためヴェツラーへ赴き、『若きヴェテルの悩み』のヒロインのモデルとなるシャルロッテ・ブッフと知り合う。しかし、彼

女には婚約者がいたため、身を引くことになる。小説と異なり、失恋したからといって彼自身が自殺することはなかった。その後、ワイマールに移り、政界活動を開始したゲーテは、七歳年上のシユタイン夫人に恋をする。後に内務長官や大蔵大臣に就任するものの、一七八六年、政治的にも夫人との関係でも行き詰ま

ワイマールに戻った後、シ

ラーと交際が始まる。二人の親交の深さを表すのがドイツ国民劇場前の銅像である（写真10）。これと同じ銅像がアメリカのミルウォーキー、クリーヴランド、シラキュース、サンフランシスコにある。ドイツからの移民が急速に増えた二〇世紀初頭に、ドイツらしさを表現するために建設された。

中国の文豪と言えば魯迅であろう。生まれ故郷の浙江省紹興以外にも中国各地で銅像が見られる。医学を学ぶために日本に

来た魯迅は、留学中に文学を志す。帰国後まもなくして辛亥革命が起こり、魯迅と同郷で教育総長に就任した蔡元培に呼ばれて新政府の教育部に着任する。その後、『狂人日記』や『阿Q正伝』を発表した。

孫文の死後、国民党の指導者となった



写真10：ワイマールのゲーテ&シラー像

蒋介石は共産党員の弾圧を行う。こうした中で魯迅は、一九二八年からソ連の文芸政策の翻訳に取り掛かり、一九三〇年にはマルクス主義文芸理論の実践を目指した左翼作家同盟の結成に尽力するが、一九三一年、同盟所属の作家らが暗殺される事件が起こる。同盟が解散させられ



写真14：慈湖公園の蒋介石像



写真13：中正紀念堂の蒋介石像



写真15：南京中山陵の孫文像



写真11：上海魯迅公園の魯迅像



写真12：国父紀念堂の孫文像

た一九三六年、魯迅は病没する。魯迅の作家としての知名度は、胡適や陳独秀、周作人などの同時代の作家たちにはかなわなかったが、それでも死後、中国の聖人と称えられたのは、毛沢東が魯迅を偉大な作家だと賞賛したためである。そのためか、上海の魯迅公園（魯迅の墓）にある魯迅の座像は文学者という

よりも、政治家の雰囲気を持つ（写真11）。杭州の魯迅像と上海の魯迅像は座る椅子が異なる。前者は岩の上に座っているのに対して、後者はひじ掛けのある椅子に座っている。北京大学初代総長となった蔡元培も椅子に腰かけているが、この椅子にはひじ掛けがない。椅子一つで銅像の印象は大きく変わる。

多木浩二は、椅子が持つ文化的・社会的側面を分析した。一七世紀のヨーロッパで椅子の背もたれが後ろに傾いたこと、ひじ掛けに丸みが付けられたことで、座った時に快適さが生まれたという。中世以来の椅子は背もたれが直角であったため、身体に無理を強いる作りであった。背もたれが傾いていなければならない

ど、リラックスできるとはいえず、威厳を保つためには身体を垂直に見せなければならなかった。

快適さと威厳という点から、座像を見てみよう。やはり、台北の国父紀念堂の孫文像（写真12）や台北の中正紀念堂の蒋介石像（写真13）などの為政者は立派な椅子に座っている。かつて台湾では孫文像と蒋介石像は、主に学校に置かれていたが、近年では撤去され、桃源の慈湖記念彫塑公園に集められている。像は次第に増え続け、現在では二百体ほどになった（写真14）。

南京の中山陵は一九三〇年代初頭に作られた孫文の墓であり、ここに巨大な孫文像がある（写真15）。これと国父紀念堂の孫文像を比べると、前者にはひじ掛けがない椅子に座り、後者は、立派な椅子に座る。北京の毛主席紀念堂の毛沢東像（写真撮影禁止）も同じような姿である。実際、この二つはリンカーン像（写真16）を参考にして制作された。



写真18：秦檜夫婦像

あるのかという問いを投げかけてくる。偶像崇拜の禁止は、神像の作成が神への冒瀆であるという側面と、人間が作ったものや、人間そのものを崇拜の対象としてはならないという側面がある。こうした禁止は、人間の姿を模ったものへの崇拜が、何かしらの危うさを抱えることを示唆しているようである。

日本にも祭神となった人物は何人もい



写真16：リンカーン記念堂

リンカーン像のモデルの一つは、古代ギリシアのゼウス像とされる。現存はないが、オリンピアには巨大なゼウス像があったことが多数の記録に残っており、近年の発掘調査からも一〇メートルを超える像があったことがわかっている。

中山陵や国父記念堂の孫文像、毛主席記念堂の毛沢東像、リンカーン像は、神殿のような建物の中に鎮座する。これらは、銅像というよりも神像に近い。キリスト教原理主義国家を舞台とするドラマ『ハンドメイズ・テイル／侍女の物語』に

において、破壊されたリンカーン像が登場するように、巨大な座像は偶像崇拜を連想させる。管見の限り、銅像の老舗、ヨーロッパ諸国では、神殿に鎮座する実在した人物の銅像を見たことがない。これは、銅像と神像の境界線はどこに

る。東照宮に祀られた徳川家康、湊川神社に祀られた楠木正成、豊国神社に祀られた豊臣秀吉などがその例であるが、銅像を崇拜の対象としているのではない。祭神となった人物は後に銅像も作られるが、神社には基本的に銅像は設置されなかつた。今、公園や駅前立つ家康や秀吉などの銅像は、地域を表象するランドマークなのである。

れている。秦檜夫婦は、岳飛の墓の前で後ろ手を縛られた罪人の姿で跪いている。「ドゲザ」こと高山彦九郎像がかなり立派な台座の上で土下座しているのとは大きな違いが見られる。

参考文献

多木浩二 「『もの』の詩学―家具、建築、都市のレトリック」 岩波現代文庫、二〇〇六年。

中国では、関羽や岳飛など祭神となった人物は廟に祀られ、木製の像が作られる（写真17）。杭州の岳飛廟には、おそらく中国で最も有名な座像がある。南宋の宰相、秦檜夫婦の銅像である（写真18）。宋（北宋）は、一一二七年、金に攻められて滅亡し、杭州に都を移し南宋となる。秦檜は、金との和平を成立させるため、謀反を口実に主戦論を唱えた武將の岳飛を捕らえた。一一四二年、岳飛は獄死し、南宋と金の和平が実現した。

岳飛は死後、救国の英雄として崇拜されるようになり、現在でも英雄と見なさ



写真17：杭州の岳飛像



「フィールドワーク実践論」

—学習効果と課題—

小河久志

本稿では今年度、筆者が担当した多文化コミュニケーション学科の選択科目「フィールドワーク実践論」（春学期開講、2年次対象）を取り上げ、その内容を紹介する。また、本科目の学習効果と今後の課題を指摘したい。

「フィールドワーク実践論」は、受講生が1年次に「フィールドワーク入門」と「オリエンテーションゼミⅡ」（すべて必修科目）を通して得たフィールドワークの手法を、実践を通して身に付けることを到達目標とした。そのため受講生には、学内外でフィールドワークを行わせる。以下では、授業を大きく学内で行ったものと学外で行ったものに分けてその内容を紹介する。

まずは学内で行った授業である。はじめに、フィールドワークという営為について受講生に考えさせた。フィールドワークはいつ、誰が、どこで、何のために、どうやって行うのか？という問いに対する意見を述べさせた後、フィールド

ワークが持つメリットとデメリットについて議論した。この作業を通して受講生に、フィールドワークの面白さと難しさの両面を意識付けした。

この導入段階を終えると、フィールドワークの手法を実践的に学ぶ段階に移行した。具体的には、問いの立て方からフィールドノートの書き方、調査準備、インタビュー、参与観察、撮影、結果のまとめ方等についてTipsを織り交ぜながら出来る限り平易に解説した。また、講義で学んだ手法を実際の現場で使えるようにするために、学内で実践する機会を頻繁に設けた。なぜなら、フィールドワークの方法は、一朝一夕に身に付けることができる類のものではなく、それゆえ訓練が不可欠だからである。たとえば、ある回の授業では、事前に作成した質問リストを用いて学内の人間にインタビューをし、そこで得た情報や気づき、疑問点などをフィールドノートに書きとらせた。実践課題を終えた受講生に

は、その都度、成果を発表してもらった。また、発表後に質疑応答の時間を設けて、発表内容について皆で議論した。その際、聴者の受講生には、発表者に質問やコメントをすることを義務付けた。この一連の作業を通して受講生は、フィールドワークの何ができて、何ができなかったのか、自身の到達点と未達点を正確に把握することができたようである。

上記の過程を経て受講生は、夏季休業期間に金沢市で行うフィールドワーク実習の準備に取り掛かった。この実習の目的は、首都圏同様、外国人の人口が増えている地方都市における多文化共生の実態と課題を把握することであった。はじめに各自の興味・関心をもとに受講生を行政班、外国人住民班、イスラーム班の3つに分けた。受講生は、同じ班のメンバーと協力しながら、調査の目的や方法、スケジュール等を盛り込んだ研究計画書の完成に向けて、文献やインター

ネットを用いた情報収集から調査内容の策定に至る一連の作業を行った。研究計画書がある程度かたちになると、先述した実践課題の成果発表同様、作成に携わった受講生はその内容について発表し、他の受講生や教員と議論した。また、発表したら終わりではなく、聴者のコメントや発表を通して得た気づきを研究計画書に反映させる作業を行った。これにより研究計画書は、各段に精練されたものになった。

続いて学外で行った授業について見ていく。それは、2022年8月24日から27日にかけて金沢市で行ったフィールドワーク実習である。本科目の集大成ともいえるこの実習では、初めて訪れる場所、初めて会う人を対象に、これまでの授業で学び実践したフィールドワークの方法を使うことで、その運用力の更なる向上を目指した。現地で受講生は各自、事前に作成した研究計画にもとづき調査を行った。それらは大きくインタビュー

と参与観察に分けられる。主なフィールドワーク先と調査内容は以下の通りである。

・金沢市国際交流課

多文化共生社会の構築に向けた活動と課題、今後の展望、及び地域住民や関連機関との関係など。

・(財)金沢市国際交流協会

多文化共生社会の構築に向けた活動と課題、今後の展望、及び地域住民や関連機関との関係など。

・金沢モスク（写真1）

モスクの活動、ムスリムの生活実態、地域住民や行政との関係、共生社会の構築に向けた課題と展望など。

・海外出身者・日本人配偶者（写真2）

生活実態、地域住民や行政との関係、共生社会の構築に向けた課題と展望など。

調査を終えて宿舎に戻ると受講生は、パソコンを使ってフィールドノートに書



写真1：金沢モスク訪問



写真2：海外出身者へのインタビュー

き留めた情報をまとめる作業に取り組んだ。これは、調査で得た大量の情報を整理するためだけでなく、調査時に気づいたことや考えたこと、疑問点などを忘れないように記録するために必ず行わせた。また、夜には全員が集まって振り返りを行った^①。その目的は、他班の進捗状況に加えて、他の受講生が調査で得た情

報や考えたこと、疑問点、問題点などを考えることであった。こうした情報や意見の交換を通して受講生は、新たな学びや発見を得ることができた。それは、今後の調査の進展、ひいては研究対象に対する理解の深化に寄与するものとなった。しかし、フィールドワークは必ずしも順調に進んだわけではなかった。たとえ

闊した経験が、受講生の成長を後押ししたのだろう。また、受講生から、金沢市でのフィールドワークを通して「自分が持っている知識や常識が必ずしも正しいというわけではないことに気がついた」、「視野が広がった」といった意見を何度も聞いた。こうした学びや気づきは、現場で想定とは異なる事態や多様な声に触れ

たからこそ生まれたものであり、フィールドワーク教育の利点を示していると言える。他方で今回の授業を通して、いくつかの課題が明らかになった。一つ目は、フィールドワーク実習の成果を広く発信できなかったことである。先述のように、今回の実習を通して受講生は、調査力やコミュニケーション力といったさまざまな能力を高めた。報告会の開催や報告書の公開は、こうしたかれらの成長を学内外に示す絶好の機会となる。それはまた、受講生の学習意欲の向上にもつながるだろう。制度上、学期中に実習を行えないため、時間的な制約をはじめとする問題はありますが、次年度以降の実施を検討したい。



写真3：フィールドワーク実習を取り上げた地元紙の記事

二つ目は、首都圏での調査が不十分だったことである。地方都市である金沢市の比較対象として今年度は武蔵野市を取り上げ、同市における多文化共生の実情や行政の取り組みについて調査する予

ば、全ての受講生は、遠慮や緊張などで事前に用意した質問項目の一部しか聞けなかったり、回答に聞き入るあまりメモが十分に取れなかったりした。計画通りに調査が進まないことへの焦り、学内調査では出来ていたことが出来ないもどかしさ。さまざまな失敗や困難に直面しながらもかれらは、めげずに、真摯にフィールドワークに取り組んだ。その成果は最終的に、レポートにまとめられた(写真3)。

以上が今年度、筆者が担当した「フィールドワーク実践論」の授業内容である。最後に、本科目の学習効果と課題を指摘したい。調査の様子やレポートの内容から、実践を繰り返すことで受講生は、インタビューをはじめとするフィールドワークの手法を一定程度、修得したことがわかった。さらに授業開始当初と比べて、彼らのコミュニケーション力は大きく向上した。不慣れな現場で悪戦苦

定だったが、時間的な制約等により十分にできなかった。武蔵野市での調査は、金沢市の特徴を浮かび上がらせるだけでなく、武蔵野市に位置する本学で学ぶ受講生が「地元」について深く知る機会ともなる。次年度は、武蔵野市国際交流協会との連携も含めて武蔵野市での調査にも本格的に取り組みたい。

謝辞

金沢市で行ったフィールドワーク実習では多くの方々のお世話になった。特に山田和夫氏をはじめとするNPO法人YOU-1のみなさん、松井誠志氏、ヒクマ・バリベイド氏には多大なご支援を賜った。ここに記して深くお礼申し上げます。

註

(1) 調査開始前には、宿舎や移動中の車内で調査対象や調査内容に関するブリーフィングを行った。

従来のベトナム研修については本冊子『樞』4号(2017年、34-43ページ)を参照してもらうこととして、今回の学生引率での留意点をあげてみたい。最大の変化はインタビュー調査を含めた他者とのコミュニケーションの取り方であろう。現状では調査において不特定多数との接触が制限されてしまうことが予想された。現実問題として、外国人観光客が相対的に少なかったことも影響しているものの、非接触型の現地調査を模索する必要に迫られた。そこで今回は以下の



か、あるいは変わらないのか、主として学生の視点から紹介してみたい。まず、科目担当者からみたポストコロナの海外体験型プログラム構築についての概略を述べた後、参加学生の実際の声を聞いてもらうことにしたい。

従来のベトナム研修については本冊子『樞』4号(2017年、34-43ページ)

を参照してもらうこととして、今回の学

生引率での留意点をあげてみたい。最大

の変化はインタビュー調査を

含めた他者とのコミュニケーションの

取り方であろう。現状では調査にお

いて不特定多数との接触が制限されて

しまうことが予想された。現実問題とし

て、外国人観光客が相対的に少なかった

ことも影響しているものの、非接触型の

現地調査を模索する必要に迫られた。

そこで今回は以下の



ポストコロナの海外研修 ——ベトナムの事例

大塚直樹 + 履修学生

今般の新型コロナウイルスによる感染症の拡大は大学教育に新たなこと／ものをもたらした。本稿に関連する点では以下の2点があげられよう。ひとつは「時間・空間の圧縮」とも名指される現代社会では感染症が地球規模に急激に拡大し、それにより人びとの物理的移動が大きな制約を受けた点である。言い換えれば、大学教育における海外体験型プログラムのあり方が問われるようになった。

ふたつ目には同じくインターネットと一般的な新型ウイルスによる感染症の拡大は大学教育に新たなこと／ものをもたらした。本稿に関連する点では以下の2点があげられよう。ひとつは「時間・空間の圧縮」とも名指される現代社会では感染症が地球規模に急激に拡大し、それにより人びとの物理的移動が大きな制約を受けた点である。言い換えれば、大学教育における海外体験型プログラムのあり方が問われるようになった。



ような現地体験に代替した。

第1に博物館・観光スポットなどの観光空間訪問型の調査である。まず科目履修者9名にそれぞれ自らが(徒歩圏内で)訪問してみたい施設を選択してもらった。渡航前の下調べの上、宿泊先ホテルから案内してもらい、訪問場所の概要を解説してもらった。その後、当該施設を参観し、ミーティングをおこなう感想を共有した。

第2に食文化体験型の調査である。

食、とくに熱帯アジアのそれに対する嗜好は個人差が大きい。そのため従来、食文化をあまり強調せず、調査の重点においてはこなかった。今回の調査では、いわゆるローカルフードを体験してもらった。

現地調査を通して分かったこと

ベトナム調査を通して、実際に訪れなければ分からなかったベトナムの実態を知ることができました。その一つとして日本との差を感じたのが商売のやり方でした。ベトナムでは写真のようにココナッツや食べ物を自転車の荷台に乗せて販売していたり地べたに座って料理をして、そこで販売する人が多く見受けられ

ました。また、ベンタイン市場を訪れた際には私たちを見て「アニョハセヨ」「こんにちは」といった言葉を合わせて商売したり価格は正確には決まっていらないという日本では考えられないことが多くありました。

(小澤 美優花)



ベトナムの商業方法

ベトナム日常風景

写真は、「バイクの洪水」とも隠喩されるベトナムの日常の風景である。街では無数のバイクが走行している。約一週間の滞在（8月18日〜8月25日）で、大通りや路地に関わらず、歩行者を見かけることは少なかった。ベトナム人にとっていかにバイクが庶民の足であるかを実感させられた。現在開発途中のホーチミン

市鉄道一号线の完成（2023年末予定）や、近年のこの国の経済成長が今後も続けば、10年、20年後のベトナムの風景は変化していると推測する。（長崎 有紗）



庶民の足「バイク」



た。具体的には学生が選択した食堂を訪問し、実際に食した料理の味や、接客・訪問客層などを観察してもらった。

第3に、これは従来、実施していた調査であるが、対照的な観光エリアの土地

利用調査である。店舗の分布状況を調査してもらうとともに空き店舗の確認をしてもらった。

以上のような現地体験のほか、やはり感染症対策が懸念材料であった。日本で生活している状況と同じように行動するよう心がけてもらうことが最大の対策であろうとの判断から、この点を事前学習でも強調した。

最後に参加学生の感想を以下に掲載して本稿を閉じたい。なお、参加学生のうち1名は秋学期から休学（留学）しているため、8名分の感想を掲載する。本稿掲載の写真はすべて参加学生が今回の調査（現地調査は2022年8月18日から8月26日まで7泊9日で実施）中に撮影した。



ベントイン市場では外国人観光客にたくさん買い物してもらうために、従業員それぞれが日常会話レベルの外国語（日本語、中国語、韓国語、英語、etc）を話していた。それにアジア圏の人の顔を識別して、言語を使い分けていた。実際、そこで調査をしつつ買い物をしてみて、人柄はよかったが、すべての商品に

ベトナムの市場

値札がなく言い値で売買することが強く印象に残った。彼らは最初、定価の何倍もの価格を提示してくるが、自分の交渉次第で定価よりも安く買えることもある。
（杉若 怜之）



ベントイン市場の風景

統一会堂で感じたこと

統一会堂では戦車や軍事品、戦争現場を4万ドン（約2000円）で見学しベトナムの歴史を肌で感じることができた。「ノロドム宮殿」「独立宮殿」という名からベトナム統一後に「統一会堂」となった。玄関は寂しげな印象だったが各国の大使を招く場の大統領官邸だったので、1〜3階の内装、家具、絵画などすべて

豪華だ。2階には地下道に通じる隠し経路や屋上には脱出用ヘリコプターが備えられている。美しい中庭の奥のフェンスにはロシアの戦車「T-54」が展示されていた。ベトナム戦争終結の姿を目の当たりにした。
（福田 翔吾）



統一会堂の外観

ベトナム建築とフランス建築の融合
ホーチミン市美術館を訪れました。美術館は全部で3つの建物があり、それぞれ彫刻、油彩、シルク絵画、漆塗りや木版画などの伝統的な作品が収められています。建物は中国人の資産家ホア氏の元別荘で、1929年から1934年にかけてフランス人の建築家によって建てられました。そのため、建物の外装や構造

はフランスのバロック様式で造られています。一方、建物内部の床にはベトナム調のタイルが貼られ、ベトナムとフランスの建築技術が上手く融合されています。
（今津 友里）



ホーチミン市美術館

実際に現地へ行き、発見できたこと

ベトナムに着いて一番驚いたのは、バイクの多さである。信号のない道を渡る際、走ってくる車やバイクの間を通過していくのだが、最初はとても怖かった。横断歩道や信号がある日本では考えられない光景であった。ベトナムは想像していたよりもずっと発展していて高層ビルも建っていた。サイゴンスカイデッキから

みた夜景はとてもきれいで、以前から新興国というイメージをもっていたので、驚いた。日本で観る夜景とは違い、ベトナムは道が長く、走行する車のライトがきれいで、より印象に残った。しかし、道が整っていないところもあり、インフラ整備はまだ課題であるのだと感じた。
（武井 詩桜）



サイゴンスカイデッキから観た夜景



写真1：栗原孝先生

2022年11月3日(文化の日)、多文化コミュニケーション学科創立10周年を記念し、「日本の多文化共生の10年」と題するイベントが開かれた。

はじめに、永綱憲悟学長より開会の辞として、学科設立の経緯に関する講話があり、学科開設の理由や、学科名決定の背景などが明らかにされた。

次に、2021年度を最後に定年退職された3名の先生が登壇し、それぞれ学科の歴史を振り返った。栗原孝先生は、学科創立から初めの5年間ほどの出来事に焦点を絞り、グローバル人材育成推進事業と学科との関連や、「楽しい学科」と

多文化コミュニケーション学科10周年 「日本の多文化共生の10年」

今野裕子

しての特色ある科目や活動について思い起こし、在学生や卒業生に今後も学び続けて欲しいとエールを送った(写真1)。

中野達司先生は、受験生や入学者のニーズが学科設立時の不安要素であったことに言及したが、同時に育て上げた学生が学科のキャリアラムに満足して卒業していったというエピソードを、ユーモアを交えて紹介した(写真2)。そして学科設立にあたり学内外の調整に奔走した新妻仁一先生は、各会議における検討内容や、学科の学びの特徴である「現場主義」「言語重視」「学際的アプローチ」に基づいたカリキュラムの誕生について、明快



写真2：中野達司先生



タイビン市場



サイゴンスカイデッキ内のアオザイ展

ベトナムの社会と文化

春学期の授業でベトナム映画『サイゴン・クチュール』をみてベトナムの文化や民族衣装であるアオザイに興味を持った。そのほか美術館や市民博物館、ベトナム戦争に関する歴史博物館などを巡りベトナムの文化や歴史にふれた。特にサイゴンスカイデッキの中に展示されていたアオザイが豪華でありながら綺麗で印

日本では見ることができない光景

ベトナムを訪れて、日本と大きな違いがあると感じたのは食べ物の売り方や売る場所である。日本にも市場は存在するがベトナムほどあちらこちらに存在するわけではない。ベトナムは道端で料理を売って販売していたり新鮮な野菜や果実も売られている。そうすると通行人も気軽に購入できるし便利ではあると思った。

ベトナムに初めて訪れた私は衛生面を深く考えてしまいタイビン市場で売られている料理は食べなかったが、日本で見かけない光景に感動した。

(渕田 早香)

象的だった。ベトナムは発展途上国ということもあり、あまり良いイメージを持ってなかったが、実際に行くとホーチミンの市街は都市的でまだ開発途上ではあるがとても活気があり賑やかで驚いた。

(小久保 彩音)



写真6: 桐生海月さん



写真5: 池山真史さん



写真8: 両角沙紀さん



写真7: 小倉風野さん

コミュニケーションにおいては、会話に偏見が紛れ込むことも多く、根本から人々の固定観念が崩れるまでには至っていないと指摘した(写真8)。

座談会終了後、三橋秀彦国際関係学部長が閉会の辞において、多文化的なコミュニケーションを取ることは日本人同士でも有効であるとの所感を述べ、本イベントを締め



写真9: 大豆ミートサンド販売の様子

見解を述べた(写真6)。

小倉さんは、役所や病院などでの外国人対応が強化され、またSNSの発達によって在日外国人同士がコミュニケーションを取りやすくなるなど、近年の日本は外国人にとって暮らしやすくなってきているとした上で、いまだに日本人の外国人に対する固定観念や偏見は根強いことを指摘した。技能実習生と関わることの多い自身の職業的な経験を踏まえ、外国人技能実習生と日本人従業員の関係

性について触れ、日本人はもっと日本を外から見る必要があると述べた(写真7)。

両角さんは、目で見えている文化の違いだけではなく、気づきにくい文化すなわち深層文化の違いがコミュニケーションの難しさにつながっているという所感を述べ、外国人技能実習生が日本語の使い分けに苦労しているという実例を取り上げた。また、地方都市でも近年はLGBTQコミュニティに対する制度面での配慮が進んでいるものの、日常のコミュニケーションにおいて

は会話に偏見が紛れ込むことも多く、根本から人々の固定観念が崩れるまでには至っていないと指摘した(写真8)。

座談会終了後、三橋秀彦国際関係学部長が閉会の辞において、多文化的なコミュニケーションを取ることは日本人同士でも有効であるとの所感を述べ、本イベントを締め

括った。改めて多文化共生の意義と課題について考えさせられる一日となった。

なお、当イベントは2022年度アジア祭の2日目に開かれたが、会場の外では多文化コミュニケーション学科の在学生が食の多様性をテーマに大豆ミートサンドの販売を行った。多文化共生に対する姿勢や行動は、こうした企画を通じて次世代の学生へも継承されている(写真9)。



写真3: 新妻仁一先生

な説明を行った(写真3)。

学科の歴史を振り返った後、過去に学科としてアジア祭に参加した時の活動の模様を収めた動画と、現役の在学生が制作にあたった動画数本の上映が行われたが、特に後者には、映像とイラストを組み合わせた学科紹介動画のほか、地域言語の履修学生と教員によって製作されたヒンディー語とインドネシア語の影絵芝居の動画が含まれた(写真4)。

イベントの後半には、卒業生を囲んで日本における多文化共生の10年を語る座談会が開かれた。参加者は、池山真史さん(学科1期生)、桐生海月さん(同1期

生)、小倉風野さん(同2期生)、両角沙紀さん(同3期生)の4名である。自己紹介の後、それぞれが社会人として働く中で抱くに至った、多様な背景を持つ人々との関わり方や日本社会における課題についての所感および意見を自由に述べてもらった。

ホテルに勤務する池山さんは、LGBTQコミュニティを例に、国内にもさまざまな文化が存在することを指摘し、「多様性」をいま非常に勉強させてもらっている」と語った。また、ムスリムの顧客にハラルフードを提供できるようホテル作りを目標の1つに掲げて就職したが、実際には厨房を分けなければならぬといったハード面での課題があり、実現は困難であると述べた。壁にぶつかりつつも、自身が学んだムスリムに関する知識を職場でも広めるなど、日々奮闘している(写真5)。

桐生さんは在日外国人が過去10年で増え、街中で外国語表記の看板が増えるな



写真4: 影絵動画上映の様子

ど、社会としての多様性への配慮や対応は一定程度見られるものの、日本人の外国人に対する理解は決して進んでいないのではないかと、という問題提起を行った。特に外国人が孤立感を深めている現実があるため、多文化共生を学んだ学生が中心になって異文化間のコミュニケーションを積極的に行う必要があると訴えた。また、一方的に日本の文化を外国人に教えるだけではなく、双方が歩み寄ることが多文化共生には求められるという

執筆者紹介（五十音順）

青山 治世（あおやま はるとし）

国際関係学部国際関係学科・准教授。

主な研究分野は、中国近現代史、東アジア国際関係史。

大塚 直樹（おおつか なおき）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。

主な担当科目は、観光地理総論、フィールドワーク入門。

小河 久志（おがわ ひさし）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。

主な担当科目は、フィールドワーク実践論、東南アジアの社会と文化。

小磯 千尋（こいそ ちひろ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。

主な担当科目は、比較宗教論、南アジアの社会と文化。

今野 裕子（こんの ゆうこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・講師。

主な担当科目は、Essentials for English Presentations、北米の社会と文化。

高山 陽子（たかやま ようこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。

主な担当科目は、世界遺産論、テーマパーク論。

榎 KaYa 国際関係・多文化フォトジャーナル Vol. 10

2023年3月31日発行

発行：亜細亜大学国際関係研究所

制作：株式会社松籟社

問い合わせ先

亜細亜大学国際関係学部

〒180-8629 東京都武蔵野市境5-8

<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

本雑誌記事の無断転写を禁じます。

©2023 Faculty of International Relations, Asia University